

後小路 薫先生を偲んで

安 東 大 隆

まさか、後小路君を追悼する言葉を書くことになろうとは、考えもしなかった。

平成七年故郷豊前に在しておられた両親の世話をしたいということ、前任の大谷大学から本別府大学に来られた。爾来、同僚としてのみならず、旧知の情を更に深めていった。彼の方が私より年少であったので、二人の間では、私の追悼を彼がするという暗黙の約束があった。事実又コンパの折に学生にその種の話をし、その時はこういう話をするのだと、言っていたという。私も又そうなるだろうなと漠然と思っていた。

が、しかし、事実はそのおもわくと相反していた。いわば無常の事実を否応なしに体现させられたのである。嘆いても、偲んでも「更にその甲斐あるべからず」である。

彼は、健康に留意していた。何度か誘われて、健康診断を一緒に受けたりもしたことがある。

その病状は、一昨年の暮れの頃から体調の不調（胃）を感じ、改まった昨年の一月肺にも変調があり、ついで精密検査により、膵臓癌が発見され、なおかつ切除不能の状態にある旨告知されたのである。

私は、その事実を一月の下旬に私の研究室で突然聞かされた。聞き了って声もなかったが、彼はそれまで葛藤があったであろうが、微塵も感じさせずに、一言、

背負わされた荷物は最後迄背負っていかねばなるまい。

と、噛み締めるように静かに言ったのである。私は黙って頷くしかなかった。今も彼のその言葉は耳底にあつて離れ

ることがない。

まもなく、福岡の病院に入院、本格的に治療をすることになったが、既に病状が進み衰弱し、体力の回復維持に重きがおかれ、本来の治療には、入れないままであった。後で御遺族から、「先生はお若いので治療をしますが、お年をめした方なら、家で過ごす事を勧めます」と医者から言われたと聞き及んだ。

そして、三月の末に還浄したのである。私は今その日を思い出せないでいる。時期が来れば、思いだし振り替える余裕もあるかなあと、思っている。

「得度の時の直綴・墨袈裟で逝きたい」が最後の言葉、たそうだ。

五十有余の生涯であった。学もまだ残している事が多いであろうのに…。

我々の国文学科にとつても、又学生の減少やそれに伴う種々な問題などで、君の助言や適格な判断、活躍を必要としていることは自明である。

君に今急逝されたことは痛恨の極みである。

言えば言うほど、思えば思うほど、繰り返しになってしまふ。愚痴である。

君の還浄の事実をふまえ、君の意志を体して進んでいくことにしよう。それが又、今となつては、境を異にしている君のこれまでの多くの恩に報いる方法であろう。

なお、法名は 勸化院釈浄俊

と申し上げる。

勸化院は、彼の仕事の中心が、江戸の勸化本にあったことによる。

浄俊は、得度の折の下賜の名前である。我どもの共通の恩師多屋頼俊先生の一字を戴いたとのことであった。

中陰も過ぎた五月の下旬、前任の大谷大学で、「偲ぶ会」を開いてくださった。御尽力くださった石橋義秀先生をは

じめ各位に深く御礼を申し上げます。
君との今際の約束の生前の論文を整理する課題もまだ果たせ
ないでいる。慚愧の念を禁じえない。

